

文部科学省委託

「日本語指導が必要な児童生徒等の教育支援基盤整備事業(動画コンテンツ開発)」

研修用 動画コンテンツ 5

外国人児童生徒等のキャリア教育



本研修(動画視聴)の目標

ライフコースの視点から、外国人児童生徒等の社会的経済的な自立に向けて基盤となる力や考え方を育てるためのキャリア教育の重要性を知り、彼らの社会参加を支えるために教育コミュニティを形成することが必要であることを理解する。

キーワード

- ・外国人児童生徒等の義務教育以降の現状と課題
高校入試、高校入学後の状況、高校卒業後の進路・在留資格
- ・外国人児童生徒のキャリア教育 文化間移動による影響
家族への支援 ロールモデル 進路支援 進学ガイダンス
- ・教育コミュニティの形成
異文化間コミュニケーション能力の涵養、
市民としての社会参加・地域活動

1 外国人児童生徒等の義務教育以降の 現状と課題



(1) 公立高校入試における配慮

- **特別定員枠**: 特定の高校に外国人生徒や中国帰国生徒等を対象とした定員枠があり、特別な試験を受けられる場合の枠
- **入学者選抜時の配慮(特別措置)**: 一般入試を一般生徒とともに受験する際に受けられる何らかの措置
例)
 - 時間延長、辞書の持ち込み、小論文における翻訳、問題用紙の拡大コピー、注意事項の母語表記、等
 - 試験教科の軽減

高等学校入学者選抜の状況

「令和2年度高等学校入学者選抜の改善等に関する状況調査」結果から

①各学校における特別定員枠の設定状況について

	特別定員枠を設定している
帰国生徒	18 (18)
外国人生徒	16 (14)

* 特別定員枠を設定している学校数を回答した都道府県数
()内は前年度調査結果

②帰国・外国人生徒に対する入学者選抜の配慮状況について

	試験教科を 軽減している	学科試験を 実施しない	その他	配慮は行なっていない (一般の入学者選抜と 同様に実施)
帰国生徒	15 (15)	2 (2)	22 (23)	12 (11)
外国人生徒	16 (14)	1 (1)	27 (25)	12 (13)

* 配慮を実施している都道府県数、()内は前年度調査結果

◎「その他」に該当する内容

- ・出題文の漢字にルビを振る
- ・辞書の持ち込みを許可する
- ・試験時間の延長 等

(2) 日本語指導が必要な高校生等の中退・進路状況

(平成29年度中)

① 中途退学率

	在籍している生徒数	中途退学した生徒数	中退率
日本語指導が必要な高校生等 (特別支援学校の高等部は除く)	3,933	378	9.6%
全高校生等 (特別支援学校の高等部は除く)	2,295,416	28,929	1.3%

② 進路状況1 進学率

	高等学校等を卒業した生徒数	高等学校等を卒業した後 大学や専修学校などの教育 機関等に進学等した生徒数	進学率
日本語指導が必要な高校生等	704	297	42.2%
全高校生等	750,315	533,118	71.1%

②進路状況2 非正規就職率

	高等学校等を卒業した後就職した生徒数	高等学校等を卒業した後非正規又は一時的に就職した生徒数	就職者における非正規就職率
日本語指導が必要な高校生等 (全日制・定時制・通信制高校及び中等教育学校後期課程のみ)	245	98	40.0%
全高校生等(全日制・定時制高校及び中等教育学校後期課程のみ)	158,135	6,746	4.3%

②進路状況3 進学も就職もしていない者の率

	高等学校等を卒業した生徒数	高等学校等を卒業した後進学・就職(・帰国)していない生徒数(不詳、死亡は除く)	進学も就職もしていない者の率
日本語指導が必要な高校生等	704	128	18.2%
全高校生等	750,315	50,373	6.7%

(3) 就職における在留資格の問題

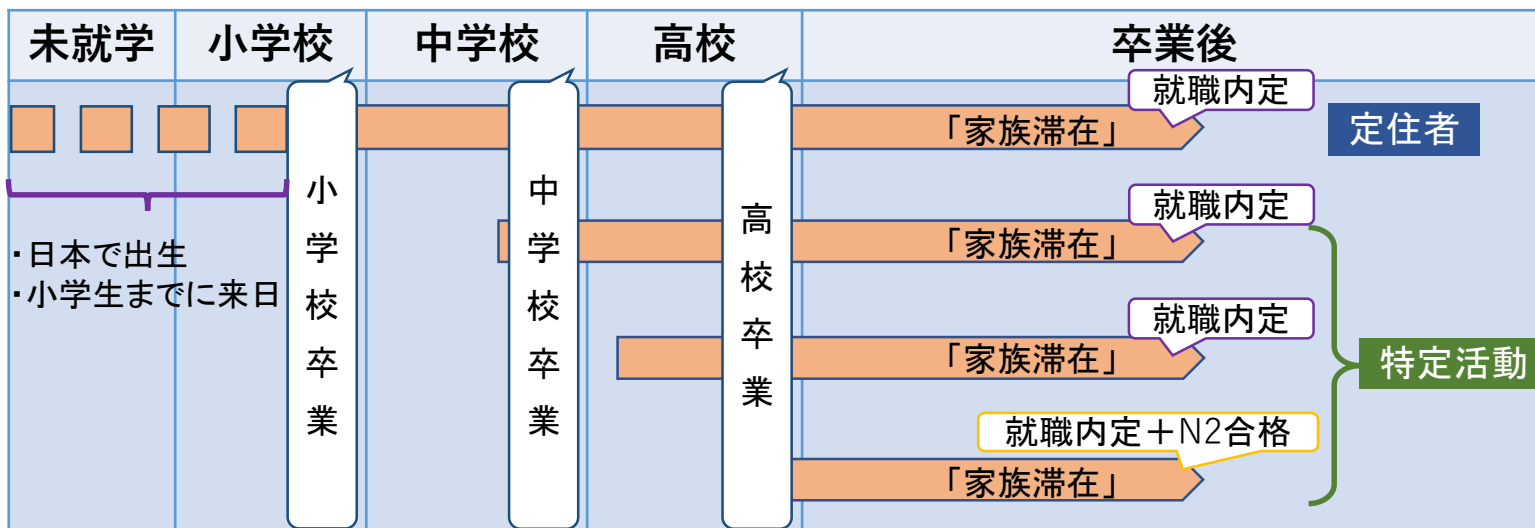
父母等に同伴して入国した外国人が高等学校等卒業後に日本で就労する場合、「定住者」又は「特定活動」への在留資格の変更が認められる場合がある。

高等学校等卒業後に就労を希望する外国人に係る在留資格の取扱いについて

主なルート

定住者: 17歳までに入国 + 小学校卒業 + 中学校卒業 + 就職内定

特定活動: 17歳までに入国 + { 高校入学(編入を除く) → 卒業
高校編入 → 卒業 + 日本語能力N2 } + 就職内定 + 親(日本在留)の身元保証



*「家族滞在」以外の在留資格で在留している者でも、「家族滞在」の在留資格該当性がある場合(「留学」等)は本取扱いの対象となる。

2 外国人児童生徒等のキャリア教育



(1) 子供たちのライフコースに目を向けて

キャリア教育

社会との関わりの中で、課題解決しながら自分らしい生き方をする力を育むための教育・支援。キャリアは、幼児期から段階的に、生涯をかけて発達するもの。

例) カルロスさんのライフコース

0歳	4歳	7歳	10歳	12歳	15歳	18歳	21歳
ブラジルで生まれる	来日	ブラジル人学校へ入学	日本の公立学校へ編入	公立中学校へ入学	県立高等学校入学	福祉専門学校へ入学	介護施設に就業

文化間移動をする子供のライフコース

カルロスさんは、ブラジルから日本へ、ブラジル人学校から公立学校へと、国の間で、そして国内でも文化間を移動している。その移動が心身の発達過程や社会化に与える影響は大きい。異なる言語・文化環境下において、社会的役割をどのように拡張し、遂行できるか。それを支援することがキャリア教育の重要な要素となる。

(2) 市民性を育成する

言語・文化的マイノリティの児童生徒は、社会参加に困難を抱える。

多様な価値観や文化で構成される社会に、自立した個人として参加し、多様な他者と関わりながら、よりよい社会の実現に向けて参与できる力を育むことが重要
・・・キャリア教育の重要な要素

市民性とは

- ①地位としてのシティズンシップ: 国民国家の国民に与えられる法的な地位、権利であり義務。
- ②感覚としてのシティズンシップ: コミュニティへの帰属感。
- ③実践としてのシティズンシップ: 民主主義、人権に関連する実践の観点から定義される。人が自ら社会に自由に参加し、政治的、社会的、文化的、経済的な目的で他者と結合しながら、他者との関わりの中で生きている個人を重視。

(3) 文化的・言語的にマイノリティであることの困難

家族との関係

- ・親の文化との差異 価値観、職業観の差異
- ・親の期待と自身の将来像のずれ
- ・言語によるコミュニケーションの困難(母語を発達させていない場合)

情報入手の困難さ

- ・日本の学校教育の制度や手続きの複雑さ
- ・子供たちの母語による情報には制約
- ・身近な者からの情報伝達が乏しい(親、親族も、日本で教育を受けた経験がない)

身近なロールモデルの不在

- ・家族、親族に「あんな風に大人になるんだ、仕事をするんだ」というモデルがない

3 キャリア教育・進路支援の実践例



(1) 中学校でのキャリア教育 実践例

キャリア教育「自分・まち・未来」

対象	中学1年5名(ブラジル・ペルー) 小学校低学年来日～高学年来日。
目標	自分の置かれている環境や社会状況を把握し、自分らしさを大切にしながら未来(キャリア)を考えることができる。
活動	1 自分の町のブラジル・ペルーの人の暮らしを知る。(国際交流協会・ハローワークで、居住状況や 就業先・職種について調べる) 2 日系移民の歴史・自分の家族の歴史を理解する。 3 浜松に暮らす日系青年の語り(動画)を見て、自身の将来像をもち、その実現に向けてこれからを描く(作文)

生徒の気づき

(外国人の就業先の表を完成して)

教師:自動車工場や食べ物屋で働く人が多い理由は?

生徒:工場が多いから。

生徒:失業している人が多くて仕事を選べないから。

生徒:日本語の勉強をしていないから日本語を使わなくてもよい仕事をする。

教師:じゃあ、デパートやスーパー、修理の仕事はなぜ少ないの?

生徒:デパートやスーパーは、日本語を話したり読まなくてはならないから。

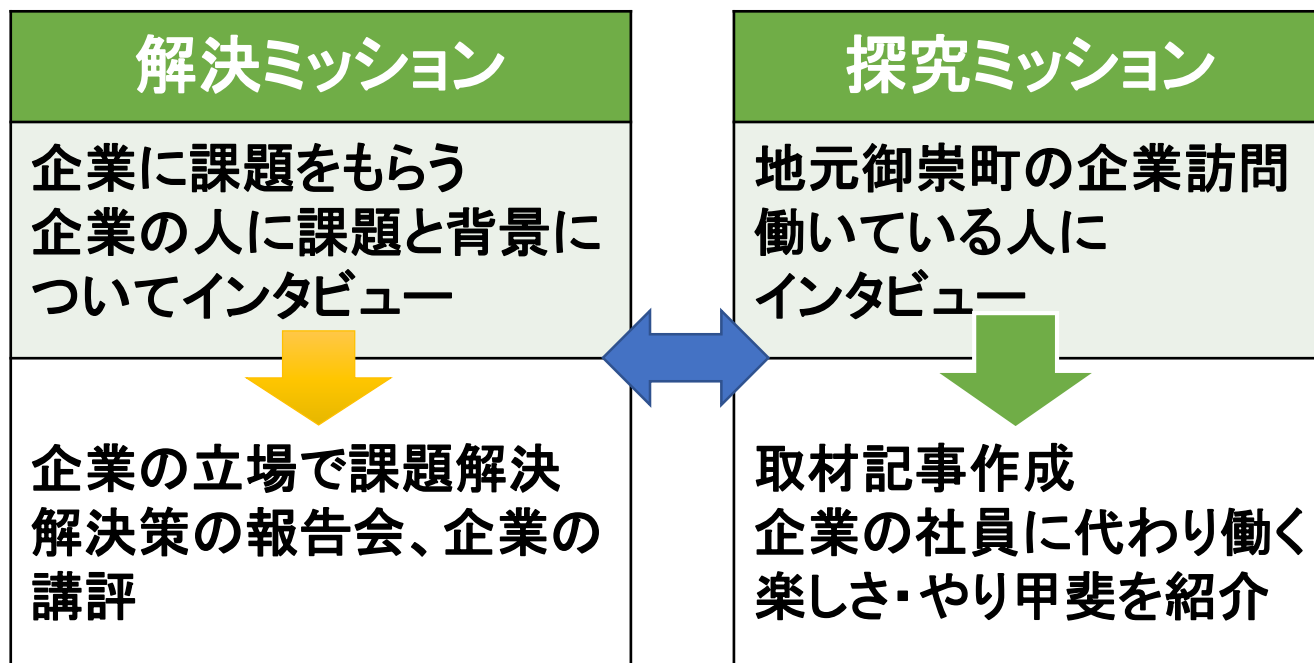
生徒:修理の仕事は勉強や資格が必要だけど、勉強をしていないから。

(2) 高等学校でのキャリア教育 実践例 地元企業の課題を解決・魅力を紹介

吉田益穂(2017)「多文化共生とキャリア教育」
第2回子どもの日本語教育研究会ワークショップ発表資料より

対象: 高校1年生
(外国人生徒・日本人生徒)

ねらい: 企業や民間NPO等が抱える「地域課題」を理解してその解決策を模索・提案したり、地元企業を見学して社員から「働く楽しさ・やりがい」を取材したりし、その報告をすることを通じて、自らの就労や進学に対するキャリア観を形成する。



地元企業の仕事と働く人々のやり甲斐に触れ、企業の課題解決のためにアイデアを提案。企業の採用で、自己効力感と喜びを得る。

… 住民として地域社会に貢献 → 社会的役割を意識し、将来像を具体化

(3) 地域と連携した進路支援 実践例

多文化進路ガイダンス

地域のNPOなどと連携し、外部講師として法律の専門家や大学の進路担当者などを招き、セミナーや個別相談を行う形も。

外国ルーツの高校生へ進路選択に必要な情報を提供する

対象	高校1年～高校最終学年
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 進路選択に必要な情報を提供し、具体的な進路イメージを抱かせる。 ・ 進路関連の書類や手続きについて理解し、必要な支援を提供する。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ①先輩の体験談（進路選択について多言語で話す。） ②進路の情報セミナー（大学や企業、進学費用・奨学金、在留資格等） ③個別の相談（必要書類の記入や手続きなどの説明。外部講師への相談）

ガイダンスの流れの例

先輩の体験談

情報セミナー

個別相談

異なるルーツや様々な進路に進んだ先輩の体験談を聞く機会を

先輩の体験談例

先輩Aさん(ネパール語)

- ・ 大学で観光を勉強。
- ・ 中学卒業後に来日。
- ・ どう日本語を学んだか。

先輩Bさん(タガログ語)

- ・ 専門学校でITを学ぶ。
- ・ 小学校5年生で来日。
- ・ どう進路選択をしたか。

先輩Cさん(中国語)

- ・ ホテルに就職し働く。
- ・ 中学校2年生で来日。
- ・ どう高校生活を過ごしたか。

進路計画の作成を通じて具体的な進路のイメージを掴む

自分の進路計画をつくってみる

(4) 地域の支援者による社会参加支援 実践例 高校生が観光客のために通訳・案内ボランティア

支援活動を行うNPO法人が
府内の交通機関と連携して実施
駅の券売機前で
外国人高校生が自身の母語で
訪日観光客向けに
通訳・案内のボランティア活動を行う。
成果：日本語や母語学習への意欲向上
接客法を学ぶ
地元の地理に詳しくなる

日本語と母語を生かして社会貢献
→ 文化的・言語的な多様性を資源に社会貢献
でき、自己肯定感・自己効力感を得る
★ 市民として社会参加、学習に意味づけ



おおさかこども多文化センター
『OKoTaC通信』No.39より

4 教育コミュニティ



(1) 子供の学びをつなぐ

学びの連続性1

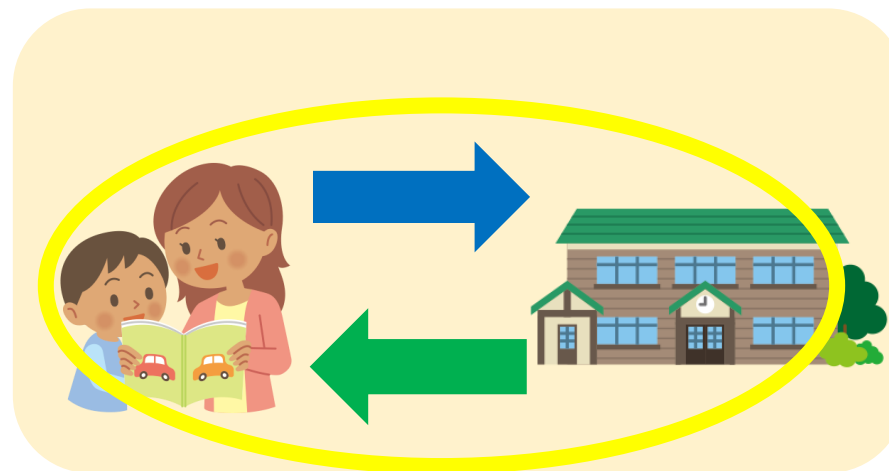
(国・地域間の文化間移動で)



培ってきた**多様な力**を
新しい**学び**に結ぶ

学びの連続性2

(家と学校・地域間の文化間移動で)



家族の言語・文化と**学校での学び**を
結び合わせる

母文化・母語での経験・学習によって育んだ力を活性化し、それを新たな学習（日本語を含む）に結ぶことで、移動によって分断されがちな学習に連続性を保障する。その学習を通して社会参加する力を育む。

(2) 文化的多様性への寛容さ

文化間移動をする子供とその家族のための教育・支援を進める上では、**言語的文化的な多様性に寛容なコミュニティ**を形成することが重要。

→ コミュニティのメンバーが、文化を越えてコミュニケーションしたり、やりとりしたりする力「**異文化間コミュニケーション能力**」を高めることが必要。

バイラム「異文化間コミュニケーション能力」

	技能 (解釈する、関連付ける)	
知識	教育	態度
	技能 (発見する、関わる)	

多様な文化の人々が、
学び合うことで養われる

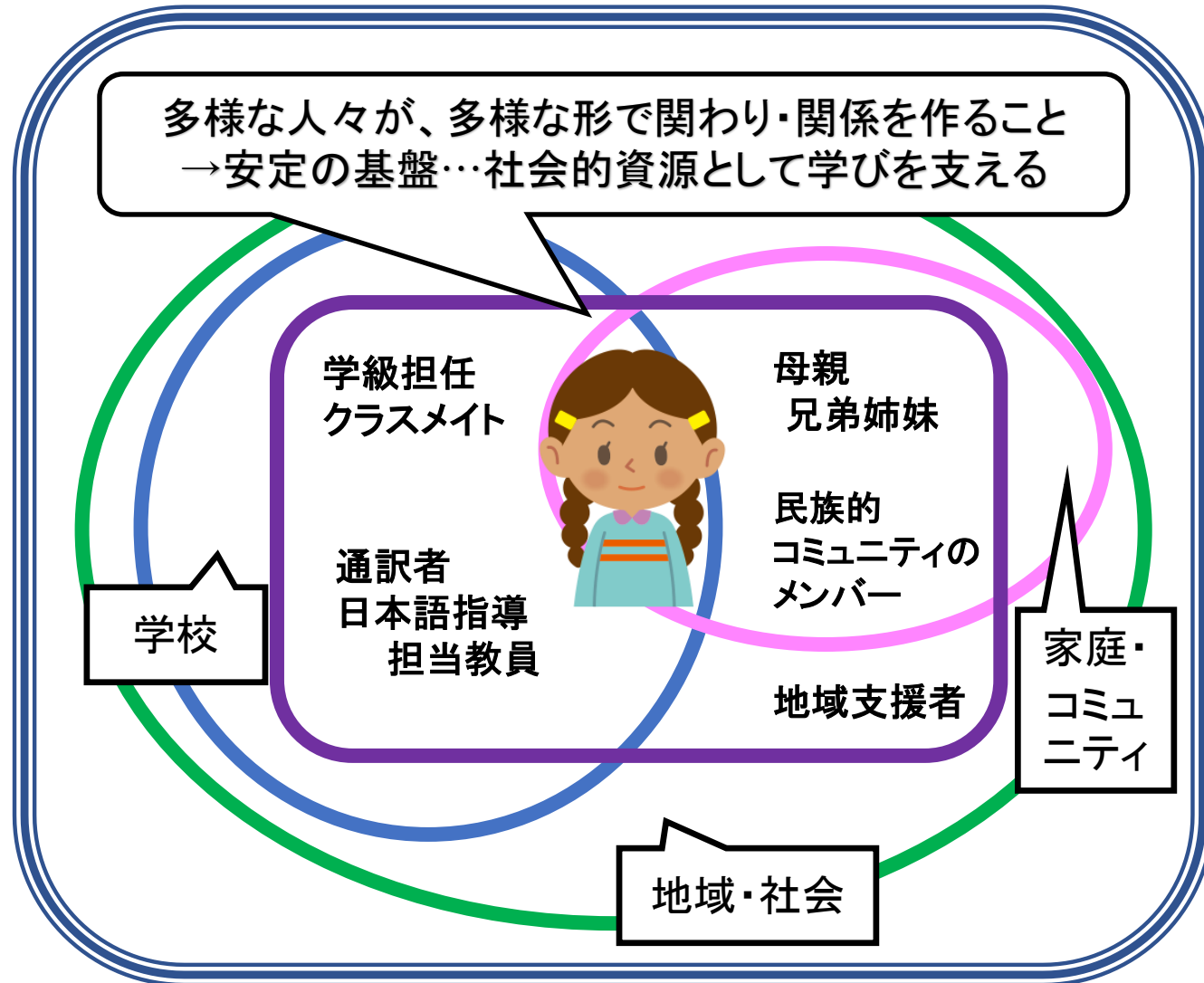
(3) 教育の「公正性」を実現するー人権教育の視点

- ・学校づくり、教育課程編成、生徒指導、学級経営全てにおいて
人権尊重の視点が重要となる。
- ・地域における教育コミュニティにおいても
「人権のための教育」の推進により、教育における「公正性」の
実現が求められる

人権教育の4側面



(4) 教育コミュニティづくり 社会との関係をつくり、自己実現できる環境



教育・支援の連携、協力

- ・学校・家庭・地域の
- ・学校間(幼少中高)で
- ・福祉・医療等関係者と



コミュニティをつくる

多様な他者との関わりの中で
日本社会の文化・構造を知り、
社会的存在として課題を解決
し、その役割遂行を通じて存
在する意味を感じ、将来像
(キャリア)を描く。

文部科学省委託

「日本語指導が必要な児童生徒等の教育支援基盤整備事業(動画コンテンツ開発)」

研修用動画コンテンツ 5

外国人児童生徒等のキャリア教育

著作権者： 文部科学省
担当講師： 齋藤ひろみ(東京学芸大学)
浜田麻里(京都教育大学)
海老原周子(文部科学省総合教育政策局国際教育課 外国人等児童生徒教育アドバイザー)
写真提供： 東京都新宿区立大久保小学校 東京都福生市立福生第一小学校
東京都国際教育研究協議会 おおさかこども多文化センター
企画構成： 日本語指導が必要な児童生徒等の教育支援動画コンテンツ開発委員会
制作： 毎日映画社
発行： 2021年3月31日



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN